


【New Poetry House 日誌】  
 名も無き詩の鑑賞会  
 The Poetry With Noname  
 奇数月の第二日曜日、定期開催  
 ひよりひとりの  
 詩への想いを大切に。  
 By かな  


◇ 2013/07/14 (Sun)

矢代レイさん、平塚さんと一緒に、五名で九編の詩を味わった中から、死生観をテーマとしていながら、どこか童歌のように心地良く感じられる…と矢代さんが紹介してくれた、私たちの秋田の、県南のコトバで綴られた方言詩をピックアップしたいと思います。



「くぐらぐのばっばへ(天国のおばあちゃんへ)」  
 今は亡きおばあちゃんへりありがとうの言葉  
 (方言バージョン)  
 作者？  
 ばっば、ママでらが。

なんじしてら。  
 そっちはなんどだ。  
 ええてが、ワリてが。  
 オラわらしの頃、  
 すぐめっコ死んで泣いでらっきゃあ、  
 ばっばゆったけなあ  
 「オラ死んだたて、そずげったに泣がねえべなや」  
 ばっば死んだすぎゃあ、  
 オラ、オイオイ泣いだせあ。  
 生きでらすぎは、何もゆえねがったども、  
 今さらだども、  
 まんずどうも、ばっば、ありがとさん。

作者は東成瀬の佐々木桂さん。四〇歳前後の男性と聞いてびっくり！ なんだか優しく、女性を想像したからです。  
 方言詩といえば福司満さんが思い出されますが、福司さんの詩はゴツゴツして男っぽく、荒々しい迫力があります。同じ男性の、同じ方言詩でも、こんな優しい詩もあって、方言詩であることは、それ自体なんの制約もない広いものだ改めて感じました。その音やリズムや抑揚のひとつひとつに、他の言葉には置き換えることが出来ない、深い意味と味わいが込められている言葉…

方言には、より豊かな感情、より複雑な心が乗っている。それをでいて「方言は取り扱いはいて迷いが多い…」という話も。普段何気なく口にしたり、当たり前のように耳にする言葉を、そのまま文字に出来ないのは何故だろう？ 何を、どんな言葉で、どんな風に。表したいものを、より適切に伝える手段がある。そんな話をしながら、以前よりもっと身近に方言詩を感じる事が出来ました。最後は、さねみさんの十三号ポストカードから一言を出し合うワークシヨップ。みんな蝉になっちゃった？ 一編の詩に見立てて、タイトリングは「思いつきの夏」。暑い夏でした☆

- 五人で鑑賞した詩のタイトルは…
- ・くぐらぐのばっばへ
  - ・草むらの絵
  - ・散歩
  - ・釣果
  - ・バス停
  - ・チャイム
  - ・海女
  - ・ちっちゃ海があ
  - ・ポリジの祝祭

◇ 2013/09/08 (Sun)  
 ロアメンバーで本家を突撃訪問すめじつ☆ ちよひ

ど岩手県立美術館で「現代スペイン・リアリズムの巨匠アントニオ・ロペス展」が開催中ということなので、勉強ついでに立ち寄りつつ、いざっ!!  
 まずはロペス展です。常に日常にモチーフを求めるロペスは、家族の肖像や、洗面台や冷蔵庫といった室内の事物、マドリッドの街頭風景や植物など、ありふれたものを描きます。「画家にとって絵画を制作することは日常であり、そこには何の気負いも銜いもない。等身大の画家によって描かれるそれらの作品には、画家自身の生の軌跡が刻み込まれている」といいます。  
 またロペスは、時とともに変化してしまう対象の瞬間をとどめるため、一枚の絵にも驚く程の時間をかけ、数



Antonio López  
 9.7(日) - 10.27(日)  
 現代スペイン・リアリズムの巨匠

年を費やすことも珍しくないそう！ それは時そのものを描こうとしているようでもあります。とどめられた一瞬は、見る者に時間の存在を逆に強く印象づけます。単なるリアリズムという枠には収まらないと言われるロベス。常に対象に忠実でありながら、表したい何かをとどめるためにひたすら格闘し続けているのです。リアリズムという態度は手段に過ぎない…。

展示に合わせ、NHK日曜美術館「そこにある永遠 アントニオ・ロベス」が七月に放送されていて、それを下敷きにしての鑑賞はなんともいえない感動でした。

そしてついに☆ 本家・僕らの理由に突撃♪ 不意打ちでお邪魔しましたが、大坪さんの計らいで、大川さんと飛田さんと六人でお話することに！

in僕らの理由

- ・ 素直になるなら
- ・ オモテウラ
- ・ あじさいいろ
- ・ 鋼の土筆

ほか

上野あづささんの「素直になるなら」の読み解きからスタート!! テーマは「現代の詩について」と一気に深い所へ。大坪さんは「若い人達の生きる力が弱まっているのではないか」と心配していて、そうした中で詩には

変化が起きている、といいます。

能代西高校・仁平裕人さんの「オモテウラ」では作者の心情が論点に。私達は、嘆きではなく葛藤の先に気付きがあり、いわば深部での覚醒と捉えていたため、異なる読み解きに、書くこと読むこと両面の難しさを改めて考えさせられました。

また、一人の中での詩の変化をみようという日原正彦さんを取り上げ、近作「あじさいいろ」と旧作「鋼の土筆」を鑑賞。そこから話はどうどん展開。なぜ詩を書くのか？ 詩が目指すものって何？ 「詩は高みを目指すもの、現代の詩は薄まっていると感じる」と大坪さん。それぞれに必然があるとも思え…。みんなの考えを伝えあいました。



濃密な話し合いの余韻が今も残ります。ありがとうございました!!

実はこの日、文学資料館に遊びに来て下さったというoobaさん申し訳ありませんでした!! 隔月開催しますので、きつとまた遊びに来て下さいね!! (変更の際は必ずブログで告知します☆)